中国地区英語教育学会研究紀要No.9 (1979)

理論言語学と英語教育

―付加疑問文の導入における伝統文法的提示法と変形文法的提示法に関する考察[1)]

広島大学大学院　高　島　英　幸

1. はじめに

ある特定の文法事項提示の際，伝統文法的指導法と変形文法的指導法とでは，いずれの場合に学習効率が高いかを解明する手段の1つとして実験授業を行ない，その統計資料を出したものが本稿である。教材としては，付加疑問文を用いた。

基礎となる予備調査が1977年9月に行なわれ，10月の中国地区英語教育学会（広島大学）に報告し，教示を仰いだ（高島 1978：24－25）。

1978年6月上旬～7月上旬に実験授業・評価テストを実施した。実験には，福井県立丹生高等学校の稲光彦教諭，さらに，枕崎市立枕崎中学校の三園久子教諭，並びに，深町協子教諭の御協力を得た。

2. 変形文法的提示法と伝統文法的提示法

実験をすすめる際に，単文を用いて，既習の付加疑問文のつくり方を復習したのち（両群共通）以下のように提示法の差異を明確にし，(i)の指導法で学習したグループを実験群，(ii)の指導法の場合を統制群とした。[2)] 但し，実験において下記で用いられている専門用語は用いられてはいない。

(i) 変形文法的提示法

付加疑問文は，話者の持つ命題内容に対する「話者の判断」に関して，聞き手に確認・同意を求める場合に用いられるものである。したがって，付加疑問文の主文には全て 'I THINK' を文頭に（深層に）仮定することができ，付加疑問文はこの 'I THINK' の次に来る（直接支配されている）文が疑問化されて付加節を構成するのである。[3)]

具体的に言うならば，付加疑問文 'John is happy, isn't he?' は，[I THINK] John is happy. という文から派生していると考えることになる。もし，主文が 'I think John is kind.' ならば，仮定すべき 'I THINK' が顕在しているため，'I think' の次の文 'John is kind.' を疑問化して，'isn't he?' とすればよい。また，主文が否定辞 (e.g. not, never, etc.) を含む否定文の場合，基本的には今述べたことと同じであるが，付加節が肯定になる点で異なる。しかし，主文が複文で否定辞を含む文 'I don't think Ken is kind.' から付加疑問文をつくる場合には，否定辞は 'I don't think' に直接支配されている文 (Ken is kind) から上昇してきたと考えられるため (Negative Transportation Rule)，同義の文 'I think Ken isn't kind.' における 'Ken isn't kind.' より付加節 'is he?' を派生させる。[4)] 主文が 'Tom thinks John is happy.' ならば，やはり文頭に 'I THINK' を仮定し，[I THINK] Tom thinks John is happy. とし，'Tom thinks ....' から付加節を派生し，'doesn't he?' とするのである。

(ii) 伝統文法的提示法

付加疑問文は，話者が自分が陳述したことに関して聞き手に確認・同意を求める場合に用いられるものである。単文以外に，複文から付加疑問文をつくる場合にも，その文の意味（表層上の）を考えて，疑問化すべきところを判断させる。

たとえば，'I think Mary is beautiful.' という文の場合には，もし 'I think Mary is beautiful, don't

I?' としたならば，「私は Mary が美しいとは思いますが，私はそう思いませんか」という意味になり，相手に尋ねても，聞き手の方は答えられない。したがって，「私は Mary が美しいと思いますが，そうじゃないんですか」と尋ねれば相手にも十分納得のいく疑問文になる。ゆえに，'I think Mary is beautiful, isn't she?' となる。

また，'Tom thinks Mary is beautiful.' の場合には，「Tom は Mary が美しいと思っていますが（彼は）そう思っていませんか」(Tom thinks Mary is beautiful, doesn't he?) となり，何ら問題は生じてこない。

一方，主文が否定文の場合には，主節あるいは従属節のいずれかに否定辞があれば，付加節は肯定になり，主文が肯定文の場合には，付加節は否定になるとするのである。

3. 実験の方法

(1) 被 験 者

枕崎市立枕崎中学校 3 年生80名（実験群・統制群共各40名），福井県立丹生高等学校 1 年生82名（同，各 4 1 名），計 162 名を対象とした。

各クラスの英語力に差がないことは，教科担任の先生方から確認してある。

(2) 実験手順

クラス担任の教師により，1 時間（50分）内で，まず，各クラスの付加疑問文に関する英語力に差がないことを確かめるために，15分間の pre-test を行なった。実施後，答合わせはせず，回収し，その直後，上記 2 の方法で，実験群，統制群，それぞれ15分間説明が行なわれた。次に，再び同一問題でテスト（post-test）を実施し，答合わせをして，用紙を回収した。（説明の際の例題は，テスト問題と重ならないように配慮してある。）

約 1 カ月後，維持力をみるためのテスト (retention-test) を実施し，問題は，pre-, post-test とは，動詞，代名詞を代えた点以外では，同じものを用いた。

以上のことを図示すると次のようになる。

テ ス ト 手 順 表

時 間	変形文法的提示法（実験群）	伝統文法的提示法（統制群）
15分	pre-test	同　　左
15分	説明（2の(i)）	説明（2の(ii)）
15分	post-test	同　　左
5分	答 合 わ せ	同　　左
	約 1 カ 月 後	
15分	retention-test	同　　左

4. 結　　果

(1) テスト結果を分析したところ，中学校の場合は，post-test においても，約 1 カ月後の retention-test においても平均正答率は同じような傾向を示していた。主語が 1 人称で肯定文の複文に限り，実験群の方が常に優れていたが，その他の場合は，統制群の方が優れていた。

(2) 高等学校の場合，retention-test と post-test と同じ条件下で実施できなかったため，両者の傾向を探ることはできなかった。したがって，post-test に関して言うならば，主語が 2，3 人称で否定文の複文の場合に限り，統制群の方が優れていた。

以下に，構文ごとの平均正答率を表にまとめてみた。但し，問17は，正答率である。

テスト結果一覧表

☆印は統制群が実験群より優れていることを示し，
◎印は実験群が統制群より優れていることを示す。

問題番号	構文の型	群	中学校 post-test	中学校 retention	高等学校 post-test	高等学校 retention
1～6	単文	実験	82.1	80.1	94.4	93.8
		統制	77.5	79.7	87.7	−
7. 8. 11. 14.	3人称複文 肯定文	実	46.9	42.1	◎ 76.2	48.2
		統	☆ 66.3	☆ 49.4	72.0	−
17.	3人称複文 否定文	実	52.5	41.5	64.3	55.8
		統	☆ 55.0	☆ 58.5	☆ 85.7	−
12. 13.	2人称複文 肯定文	実	28.8	37.8	◎ 64.3	39.6
		統	☆ 45.0	☆ 40.5	48.8	−
18. 19.	2人称複文 否定文	実	52.5	50.0	56.0	38.4
		統	☆ 67.5	☆ 59.8	☆ 75.0	−
9. 10. 15.	1人称複文 肯定文	実	◎ 81.7	◎ 83.5	◎ 97.6	83.7
		統	80.0	69.1	95.2	−
16. 20.	1人称複文 否定文	実	◎ 53.8	◎ 39.1	◎ 79.8	46.6
		統	47.5	37.8	64.3	−
7～20	−	実	53.9	50.4	◎ 75.9	53.0
		統	☆ 62.9	☆ 52.8	74.0	−

5. 考　察

(1) 中学生にとって，ある要素（この場合は，'I THINK'）が省略されているとみなし，それを補って考えること（深層構造を提示すること）はむずかしく，高校生になるとやや容易になるのではないかと思われる。[5]（結果一覧表中，実験群の方が優れているのは，中学校の場合，1人称主語に限られているが，高等学校の場合，圧倒的に実験群の結果がよい。）

(2) 高校の場合，主語が2，3人称の否定文に限り統制群が優れていることの理由として次のことが考えられる。

2の(i)で言及したように，実験群には 'I don't think ....' という文であれば，否定辞 (not) を1つの右の文へ移動して（戻して）考えるように指導した。(Negative Transportation)
このために，問17，18，19（次の section の6に問題が載せてある）を問16，20と同じものと考えたために生じた誤りであるように思われる。つまり，否定辞 (not) があれば，それを1つ右の文へ移動させたために，問17では主文を Taro thinks my mother did not do some shopping yesterday. とし，その正答が①の does he? であるのに②の doesn't he? を選んだのである。また，問18でも同様に考えたために誤りを生じたのであろうと思われる。実際に誤りを分析した結果，このことが確認された。

(3) 統計表の平均正答率の有意差をみるために，t 検定を行なったところ，中学校の問7，8，11，14（$t=-2.4876$，$0.01<P<0.03$）と高等学校の問17（$t=2.34566$，$0.02<P<0.05$），問18，19（$t=2.03001$，$0.02<P<0.05$）に限り有意差がみられた。[6]

しかしながら，これらの事実から２つの指導法（提示法）に全く差はなく，どちらの方法を用いても全く同じであると主張するのは，いささか急ぎ過ぎる結論であるように思われる。その理由として考えられることは，

(i) サンプル数がきわめて少なく，t 検定は，サンプル数が多い程，信頼性が高くなるということがあること。

(ii) 教師の一寸した工夫で生徒の理解度は異なることがあり，それが approach, technique, method のいずれに起因しているのか区別がつきにくいこと (Anthony 1963)。

(iii) 一時間の授業で全てを判断することは危険であり，言語能力はその性質上長期にわたる過程であること (Wilkins 1972: 213)，などが挙げられるからである。

6. テスト問題（Pre, post-test 用）

(1) Jiro is kind, [(1) is he (2) isn't he (3) does he (4) doesn't he]?

(2) You were in England last year, [(1) were you (2) weren't you (3) did you (4) didn't you]?

(3) You can play tennis with me every Friday, [(1) do you (2) don't you (3) can you (4) can't you]?

(4) Jiro has gone to Tokyo, [(1) does he (2) doesn't he (3) has he (4) hasn't he]?

(5) Emiko went downtown, [(1) was she (2) wasn't she (3) did she (4) didn't she]?

(6) You hoped for a good summer last year, [(1) were you (2) weren't you (3) did you (4) didn't you]?

(7) Hanako knows that Ken is a kind man, [(1) does she (2) doesn't she (3) is he (4) isn't he]?

(8) Tom thinks you are going to see the movies, [(1) does he (2) doesn't he (3) are you (4) aren't you]?

(9) I think it is Tom's watch, [(1) do I (2) don't I (3) is it (4) isn't it]?

(10) I think you were in the 8th grade last year, [(1) do I (2) don't I (3) were you (4) weren't you]?

(11) Taro thinks you were at home yeaterday, [(1) does he (2) doesn't he (3) were you (4) weren't you]?

(12) You think you can work with her, [(1) do you (2) don't you (3) can you (4) can't you]?

(13) You think Tom will marry Helen, [(1) do you (2) don't you (3) will he (4) won't he]?

(14) Tom hopes Mother has cleaned his room, [(1) does he (2) doesn't he (3) has she (4) hasn't she]?

(15) I think John went to church yesterday, [(1) do I (2) don't I (3) did he (4) didn't he]?

(16) I don't think my father went to his office two days ago, [(1) do I (2) don't I (3) did he (4) didn't he]?

(17) Taro doesn't think my mother did some shopping yesterday, [(1) does he (2) doesn't he (3) did she (4) didn't she]?

(18) You don't think Tom is handsome, [(1) do you (2) don't you (3) is he (4) isn't he]?

(19) You don't think you will come and see me tommorow, [(1) do you (2) don't you (3) will you (4) won't you]?

(20) I don't think you hoped to see me, [(1) do I (2) don't I (3) did you (4) didn't you]?

（注）

1) 本稿は，昭和53年8月23日の全国英語教育学会第4回（沖縄）大会での口頭発表に加筆，訂正を施したものである。

2) 実験群における指導の理論的基盤に関しては，高島（1978：17－24）を参照されたい。

3) 本稿において，「付加疑問文」「主文」「付加節」などの用語は，以下のように区別している。

付加疑問文
John is a linguist, isn't he?
主文　付加節

4) Lakoff は個人談話として，Dwight Bolinger が，(a) I don't think Bill left. と (b) I think Bill didn't leave. の二文を比べた場合，(b) の方が話者の確信の度合いがより強いと主張している旨を載せている (Lakoff 1970: 158)。

たとえ，Bolinger の指摘が正しいにせよ，本稿における指導法には何ら影響を与えない。

5) 分析結果を中学生，高校生の代表として信頼するには推論の域を出ない。羽鳥（1970：114－115）に言及されているように，学年が進むにつれて学習者の理論性や抽象的思考力を伸ばす必要性があることを，むしろ，ここでは強調したい。

6) 本稿では，両側検定 (two-sided test) である。

REFERENCES

Abercrombie, D. 1956 *Problems and Principles in Language Study*. London: Longman Group Ltd.

Anthony, E. M. 1963 "Approach, Method and Technique," *English Language Teaching* 17, Jan., 63-67.

Cattel, R. 1973 "Negative Transportation and Tag Questions," *Language* 9, 3, 612-639.

Hatori, H. (ed.)（羽鳥博愛編）1970『英語学習の心理』講座・英語教授法，第10巻，研究社.

——— *et al.*（羽鳥博愛他）1978 *New Everyday English Course* 1. 2. 3. 中京出版.

Householder, W. 1972 "Reviews: Essentials of English Grammar by D. T. Langendoen," *Language* 48, 1, 184-190.

Inamura, M. *et al.*（稲村松雄他）1977 *New Prince English Course* 1. 2. 3. 開隆堂.

Iwahara S.（岩原信九郎）1965『教育と心理のための推計学』日本文化科学社.

Jespersen, O. 1940 *A Modern English Grammar on Historical Principles* V. Copenhagen: Ejnar Munksgaard.

Lakoff, G. 1970 "Pronominalization, Nagation, and the Analysis of Adverbs," in Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, Walther, Mass.: Ginn and Company.

Lakoff, R. 1969 "A Syntactic Argument for Negative Transportation," Binnik, *et al. Papers from the Fifth Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, Chicago, Ill.: Dept. of Linguistics, Univ. of Chicago, 140-147.

Nakamura, K. *et al.*（中村敬他）1978 The *New Crown English Series* 1. 2. 3. 三省堂.

Ogawa, K. 1976 "An Analysis of English Tag Questions," *Sixth California Linguistics Association Conference Proceedings*, 43-55.

Ota, A. *et al.*（太田　朗他）1978 *New Horizon English Course* 1. 2. 3. 東京書籍.

Quirk *et al.* 1972 *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Ltd.

Takashima, H.（高島英幸）1978「新言語学と英語教育—付加疑問文と付加命令疑問文をめぐって」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 8. pp. 17－28.

Wilkins, D. A. 1972 *Linguistics in Language Teaching*. London: Edward Arnold.